

研究ノート

子どもの主体的な表現活動の表れ — 造形遊びの場面に着目して —

池田 純子

(受理日：2021年1月5日)

Independent Expression of Children: Art Activities of Nursery School

Junko IKEDA

要 旨

幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、子ども主体の遊びや学びが重要であると明記されている。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ感染症と称す）の対策における登園自粛期間を終えた保育園での活動事例をもとに、子どもが主体的に遊ぶ場面に焦点をあて検討を行った。子どもたちが主体的に表現するために必要な保育環境を整えることは、子どもが自分で考えて遊ぶために必要であることが、改めて明らかとなった。

キーワード：子どもの主体的な表現、保育環境、絵の具遊び

1. はじめに

子ども主体の遊びや学びが重要であることが「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂・定で位置づけられている。このことについて中坪¹⁾は、子どもは大人から知識や技能を与えられて身につけるのではなく、子ども自身が自分の欲求に基づきながら、主体的に周囲の環境と関わる大切であり、その資源となるのが遊びである。子どもが主体的に遊び、その遊びが充実するための環境作りや援助のあり方を考えることはどの園にとっても重要な課題の一つであると述べている。河邊²⁾は園における遊びの特性を、ある一定時間（保育時間・保育年限）、ある一定の限定された場「幼稚園・保育所という保育施設を中心とした環境」で展開される遊びは、子ども自身が意識しているか否かは別にして、周囲の同年代の子どもの言動に影響を受けながら展開する。そこには保育者が存在し、子どもの姿に応じて、自発活動とし

ての遊びが充実するように援助する役割を担うとしている。子どもは精神的に安定すると環境に主体的にかかわって遊びを生み出すようになる。そして、次第に遊びのなかでさまざまな課題を乗り越えていくようになる。どこで誰と遊ぶか、遊びに必要なものは何か、どのようなモノを取り込むか等、豊かな遊びのなかで子どもは多くの自己決定の機会に出会い、実現する喜びを味わう。これはまさに「生きる力」を身につけていくプロセスであるといえよう。充実した遊びのなかで、子どもが主体的に行動する力を育てることは普遍的かつ今日的な課題であるとしている。

このように子どもたちは保育者が準備した環境や援助のもとで主体的に遊ぶことが望まれる。本研究では、コロナ禍において保育者が準備した環境のなか、子どもが自ら遊びを作りだし主体的に楽しんでいる場面に焦点をあて検討し、考察することを目的とする。

2. 研究の方法

保育園の保育場面への参加及び保育者へのインタビュー調査をもとにした分析・考察を行う。倫理的配慮や匿名性への記述がある方が良い。

研究対象の保育園について

S区にあるS保育園は0歳児9名、1・2歳児各11名、3～5歳児まで各12名ずつの少人数保育を行う認可保育園で、子どもたち一人ひとりの心に寄り添う保育、子どもたちの「やってみたい」という主体的な学びを大切に、目の前にいるその子どもの興味関心に合わせた保育を大切にしているS保育園の保育の事例については池田³⁾に述べている。

(1) 保育場面への参加と観察

2020年7月14日、3～5歳児のクラスの自由遊びの場面への参加・観察を行った。

今回、保育に参加した2020年7月はコロナ感染症による登園自粛期間（4月～5月）を終えて通常保育を始めて1ヶ月ほどがたった時であった。

(2) 担当保育者と副園長へのインタビュー調査

保育参加後、担当保育者と副園長にインタビューを実施。4月からの保育園の様子や参加当日の保育内容について説明を受けてから、子どもたちの姿や保育者の関わりについて聞き取りを行った。4月、5月は登園自粛期間で6月から通常保育になったことで、例年とは活動内容や子どもたちの成長の様子が違っていること、保育環境も従来とは変えている点があることも説明があった。入園・進級の4月に休園になり、子どもたちが大きくなったと自分で自覚して、物事を進める大切な時期に保育がかなわなかったこと、そのため、7月とはいえ、まだまだ自分の遊びを見つけることが中心で、保育環境も例年で言うなら5月の頃の設定をしていること、行事等も行っていないことで経験できていないこともある。6月の保育の再開から1ヶ月ほどが経過し、ようやく落ち着いた様子が見られるようになったと感じている。焦ることなく、子どもたちの姿に合わせて保育を行っていくことを職員で確認し合っている。その点を踏まえて、子どもたちの姿と一緒に考えるという姿勢でインタビューを行い、ともに振り返りをした。

3. 活動事例と考察

〈事例〉絵の具遊びの場面

7月14日(火) 午前中・3～5歳児クラス

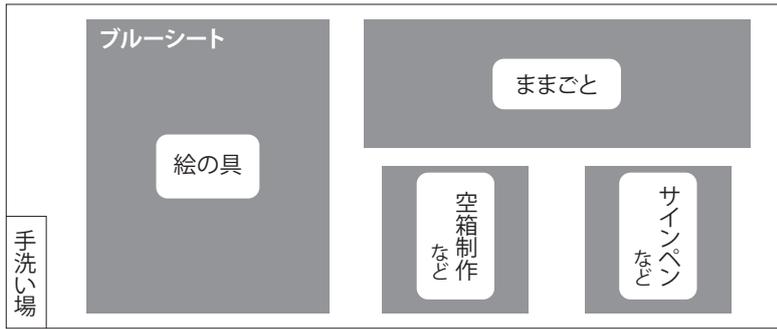
保育室にはコーナーが設定されていた。

ブルーシートが保育室の半分ほどに広げられている。ここでは絵の具遊びができるようにと、牛乳パックを切って、その中にペットボトルを入れたものを4つ組み合わせ一人分として使用している。(写真参照) 絵の具は12色を自由に使えるように出しており、ペットボトルに入った水で濃度を調整できるように準備が整えられている。すると、5歳児の女児が「見て見て。似ているけれど、ちょっとずつ違う色なんだよ。」と絵の具入れを見せてくれた。中をのぞくと、微妙に色の違うピンク色が濃淡で4色、作られている。自分で色を考えながら調合して試しながら描いている。「もうちょっと白を入れてみようかな。」「いい色ができた。」と真剣な表情で実験に取り組んでいるようである。その隣では5歳児の男児が黄色とオレンジ色を作っており、緑系の4色を作っている子もいる。「どんな色になった?」「描いてみて」と友達が作った色にも興味津々である。少し離れたところでは、3歳児が「ぼくもやってみたい」と絵の具と牛乳パック絵の具入れを持って、保育者とともに色作りをしていた。保育者は「お姉さんたちみたいに自分で絵の具を入れてみたら?」と言葉をかけ、見守りながらできないことだけを援助していた。できあがった色で白画用紙や大きな紙に描いては、「こういう色かあ。」「もう一回作ってみようかな。」「その色も使わせて」と色を確認しながら描く姿が見られた。作った色を楽しむように点々で描いたり、虹のように並べて描いたりしている。

そのすぐそばでは、牛乳パックからペットボトルを取り出して洗う2人の5歳児の姿があった。「色がきれいだね。」「水を入れても、ちょっとずつ色が違うね。」「流すのもったいないけど、きれいに洗おうよ。」「洗っても少し色が残るね。」「それにはまた同じ色を入れればいいんじゃない?」と洗うことを楽しんでいるようであった。

〈絵の具の色を作って遊ぶという子どもの主体性〉

S保育園では、子どもたちの「やってみたい」という主体的な学びを大切に、目の前にいるそ



(参照写真)

の子どもの興味関心に合わせた保育を大切にしているが、絵の具で遊ぶ時の様子を見ているといくつかのパターンがある。夏開き³⁾という行事時には、園庭にありとあらゆる色の絵の具が用意され、水着着用、親子で全身を使って遊ぶ。この時の絵の具は保育者と保護者が濃度の濃いもの、薄いものをバケツや空き容器に作って配置する。通常の保育の中では、保育者が子どもの要望に合わせて準備したり、保育者のねらいに合わせた色・濃度のもが準備される。今回の絵の具遊びの場面は、コロナ感染症対策の一環で、できるだけ子ども同士が密にならないようにとの配慮から、一人一人に絵の具を入れるための容器と筆が準備された。保育者によると、「いつものように一カ所に絵の具を置くと、顔と顔がくっつくほどに集まって、絵の具容器から筆を選ぶので、離れることを目的として各々に絵の具入れを準備してみた。」とのことである。「絵の具を誰が作るかまでは考えておらず、子どもたちの使いたい色を保育者が作ればいいと考えていた。」という言葉からもわかるように、ここでは、子どもたちが密にならないようにということに重きが置かれていた。

遊びが始まってみると、5歳児の女児が自分で絵の具チューブから絵の具を出して、水で濃度を調節しながら色を作り始めた。そして、この女児が「いろんなピンクを作るんだ。」と濃淡のあるピンク色を4色作り始めた。「同じようだけちょっとずつ違うピンク色を作ったんだよ。」と言っているように、4つのカップには少しずつ違うピンク色ができあがっている。できあがった4色のピンク色を試すように画用紙に描いていく。何かを描くというより、自分の作った色がどんな色なのかを画用紙の上で確認しているように見える。描いて

みては、「白を足してみようかな。」「きれいにできたな。」と感想を述べながら、作っては描いてみるを繰り返している。それを見ていた3歳児の男児が「ぼくもやってみよう。」と保育者に手伝ってもらいながら、同じように4色を作り始めている。絵の具チューブから少しだけ色を足すという作業が難しいと感じているらしく、「ちょっとだけ入れてね。」と保育者に頼む姿が見られた。4色できあがると、大きな紙に線で伸び伸びと描いていく。こちらは試すというより、作った色で描くことを楽しんでいる。

これまでの保育の中で、絵の具で色を作るという活動がなかったわけではない。2019年2月に保育参加したときには、5歳児が春の集いという会のための背景を作るために、みんなで相談しながら樹の幹の色を調合していた。何度も試すことを繰り返し、大きな樹の幹をみんなで塗る場面があった。ここでは、自分たちのイメージしている樹の幹の色を作って塗りたいという子どもたちの思いがあり、色を作る目的があった。子どもたちの主体は「樹の幹の色を自分たちで作る」ことにあったと考えられる。「こんな色を使いたいな」と思う場面でも、大人が「ここは常識的に考えるとその色は使えない」と判断すれば、選択肢が一つ減ることになる。それは些細なことであるかもしれないが残念なことであると木谷⁴⁾が述べるように、子どもたちが自分の使いたい色を自分で選ぶことは必要なことであると考えられる。

今回の事例では、使いたい色を作るという主体性ではなく、色を作って遊びたいという子どもの主体性が見てとれる。幼稚園教育要領⁵⁾、保育所保育指針⁶⁾第2章表現 [内容] では、教師(保育士等)は、幼児(子ども)が周囲の環境に対して

何か気付いたり感じたりして、その気持ちを表現しようとする姿を温かく見守り、共感し、心ゆくまで対象と関わることを楽しめるようにすることが豊かな感性を養う上で重要であるとしている。自分で4色のピンク色を作ってみたいという子どもの主体的な気持ちを保育者は受け止めて、心ゆくまで試しながら作るという行為を見守っている。そして、存分に色作りをして描いている友達を見て、同じ5歳児は自分もやってみたいと、色作りを始めている。3歳児は自分に取り入れられる部分を取り入れて保育者に援助してもらいながら、やってみたい気持ちを実現しているのである。幼稚園教育要領⁵⁾、保育所保育指針⁶⁾第2章表現〔内容の取り扱い〕(3)に、幼児(子ども)が心に感じていることは、それを表現する姿を通して他の幼児(子ども)にも伝わり、他の幼児(子ども)の心に響き、幼児(子ども)同士の中で広がっていく。このように幼児(子ども)同士の表現が影響し合い、幼児の表現は一層豊かなものとなっていくとあるように、子どもたちは友達の表現を見て触れて、心を動かされ、自分もやってみようと思う。この「やってみよう」こそが子どもの主体性であり、「やってみよう」が実現できるように環境を整えて、見守ることが保育者には求められることが改めて示唆される。

〈保育者のねらいと子どもの主体性〉

絵の具の色を作りたいという子どもの主体的な思いは、コロナ感染症対策や雨という環境や保育者の「誰が絵の具を作るかまでは考えていなかった。」という偶然が重なったことから表れたといえる。河邊²⁾が述べるように、保育者は自分が担任しているクラスの子どもの全員(あるいはクラスや学年の枠を超えて)育ちを願い適切な援助を行おうと思う。幼稚園教育要領、保育所保育指針でも教師(保育士等)は幼児(子ども)のもっているイメージがどのように遊びの中に表現されているかを理解しながら、そのイメージの世界を十分に楽しめるように、イメージを表現するための道具や用具、素材を用意し、幼児(子ども)と共に環境を構成していくことが大切であるとしている。しかし、保育者の計画的な環境の構成は、あくま

でも子どもの内発的動機に即していなければ、子どもの主体性を引き出しつつ新しい遊びに出合わせることはできないのである。

保育者は子どもの遊びが充実すること、発達に即した経験ができることを願って毎日の保育にねらいを持つ。そのためには、どのような環境の準備が必要であるか、どのような素材や道具の用意をすればよいのかを考えて保育にのぞむ。「誰が絵の具を作るかまでは考えていなかった。」という言葉のみを捉えたと、あまり考えないで保育に望んでいるかのように聞こえるかもしれない。しかし、担当保育士は、聞き取りの中で「4月5月と登園していない状況で、やっと保育園での生活がスタートして1ヶ月がたち、子どもたちいつもの生活がもどってきたと感じている。雨も降っていたので、おおまかなコーナーを設定して、後はできるだけ密にならないように遊べるようにしたかった。」「絵の具で何を描こうとか何をしてほしいとかを決めるのではなく、やりたいことがみつかるといいなと思っていた。」と述べている。「子どもたちの様子を把握して、少し気持ちに余裕をもって子どもたちと関わっていきたくて考えている」とも話している。このような一見、積極的ではないかのように見える環境の準備は、保育者が子どもたちを理解して考えて構成していることがわかる。子どもたちはそのことを意識してか無意識かは断定できないが、受け止めて、いつもとすこし違う環境や道具を受け入れ、自分の「やってみよう」を見つけて主体的に遊びはじめている。保育者の実態把握から考えたねらいが子どもたちに受け入れられているといえよう。保育者の援助や環境構成が的を射ると、このように子どもたちの主体性が発揮され、遊びが展開されていく。

そばで友達が使い終わったペットボトルを洗っていた2人組も同様であった。保育者が「お片付けしてくれているの？その前に絵の具で遊んだら？」と声をかけたのに対し、「違うよ、私たちはこれで遊んでいるんだよ。」「絵の具は今日はやらないんだよ。」「絵の具するのが楽しいときもあるし、そうじゃないときもあるんだよ。」「きれいになるからお片付けみたいだよ。」と返している。大人から見れば片付けに見える活動であり、本人たちも片

付けの要素があることは承知しているのであろうが、今、私たちがやりたいことはこれであるという明確な返事が返ってきている。「ピンクの色がちょっとずつ違うって本当だね。」「水で薄めてもきれいだね。」「そうだねー。」と感じたことを口にしながらかつペットボトルを洗っていた。幼稚園教育要領、保育所保育指針の表現〔内容の取り扱い〕にも示されているように、幼児（子ども）は、大人からするとささいなことと思えるものでも大切なこととして受け止め、自分と同じ思いをもっている幼児（子ども）に出会うと自分の感性に自信をもち、違う思いをもっている幼児（子ども）に出会うと違う感性を知ることになり、結果としていろいろな感性があることに気付くのである。絵の具で遊ぶのではなく、色水遊びを楽しみながら、ペットボトルをきれいにすることを楽しいと感じる仲間と遊ぶことを選んでいたのであり、この遊びも主体的な活動であるといえよう。2人に保育者が「きれいにしてくれて、ありがとう。」と言うと、「褒められちゃったね。」「遊んでいるだけなのにね。」と小さな声で言っていた。同じ感性をもつ友達と遊ぶ楽しさが伝わってくる場面であった。

〈汐見稔幸の提案を検証する〉

幼児造形教育研究会・夏のオンライン研修会での、「コロナ禍における子どもと保育、造形について」（汐見稔幸）と事例を検証してみる。汐見⁷⁾は、「今まで、日本の保育は三密を強いている社会であったのではないかと、特に保育現場では子ども一人に畳1枚分^{注)}です。これからは、子ども一人一人が自分で考えたり友達と相談して表現することのできる人数で保育することが望まれます。同じ場所に密集しないで子どもたちが分散できるように、いろいろな素材をコーナーを作って分散して配置する。可動式遊具等も必要になる。こういう環境を整えると、子どもたちは自分たちで考えて遊ぶから、保育者はできるだけ「危ない」といわないで、そばで見守る、指示や命令はしないようにするとよい」と提案している。S保育園の大まかなコーナーは室内という制限の中で、汐見の提案する分散しての配置を行っている。そして、その環境の中で、子どもたちは自分で考えて遊ん

でいる。保育者は命令や指示は出さずに、援助を求められたときには必要な援助をして見守っている。危ないことは起きない環境ということもあり、「危ない」とは言っていない。汐見の提案が、保育室の中で保育者と子どもたちによって実現されている。保育者たちは今の環境の中でできることを考えて環境を設定しているだけと、意識せずに行っていると話しているが、子どもの実態を正確に把握して環境を設定できていることが、子どもたちが自分で考える保育につながっているのではないだろうか。汐見は、「表現が自由にできること」「自分は愛されていると思えること」この2点が子どもには大切で、これがないと人を攻撃する人間になってしまうとも話している。子どもたちが自由に表現できること、つまり、S保育園の事例のような自分で考えて表現する環境があることが子どもたちにとって大切であることは明らかである。

4. まとめと今後の課題

S保育園での保育参加・観察での一場面から、コロナ禍において保育者が準備した環境のなか、子どもが自ら遊びを作りだし主体的に楽しんでいる場面に焦点をあて検討した。

絵の具で色を作りたいという子どもの主体的な活動は、環境構成や保育者の子どもの実態の正確な把握、子ども同士の感性の共感及び他者への理解から成り立っていたことがわかった。子どもは遊びのなかでさまざまな経験を積み重ね、遊びのなかで学ぶといわれている。子どもが「おもしろい」と心から思えるような遊びが子どもを育てる。そして、子どもに充実感をもたらす遊びでなければ主体性を育むことにはならないと河邊²⁾は述べている。自分専用の絵の具入れをもったことにより、絵の具で色を作ることが「おもしろい」と感じ、遊びはじめた子どもがきっかけとなり、色を作る遊びをはじめると子どもや絵の具入れのペットボトルを洗うことを「おもしろい」と感じて遊びをはじめると子どもが表れた。いつもとはほんの少しだけ違った環境がこのような遊びを作り出したといえよう。絵の具は絵を描くための材料であるが、色を作ることも楽しいと発見して、遊びが充実していく。「やりたい」ことができる環境が大切であ

ること、子どもの実態を把握しての環境作りが必要であることが改めて示唆された。自分と同じ感性の仲間と出会うと楽しい、反対に自分と違った感性を持つ仲間を見ることも楽しいという子どもたちの感じ方も再確認できた。

今年度はコロナ感染症対策の一環で、度々の保育園への保育参加・観察はかなっていないのが現状である。保育に参加した一場面を切り取っての考察となり、流動的な保育の様子を捉えることができていない。また、絵の具の色を保育者が作る、子どもが作るという基本的な環境の設定がどうのようになっているかというデータをとることができていない上での検討となっている。今後は、絵の具を作るのは誰なのかという根本的なことをデータ分析して、遊びとしての絵の具の色作りについても検討していきたい。

引用文献

- 1) 中坪史典「主体的に遊ぶ子ども―遊びを支える保育者～かえで幼稚園の実践から学ぶもの～」エイデル研究所 2016年
- 2) 河邊貴子「遊びを中心とした保育」萌文書林 2005年
- 3) 池田純子「子どもたちが主体的に活動するための保育者の関わり―S 保育園の造形表現の取り組みから考える―」淑徳大学短期大学部研究紀要第62号 2020年
- 4) 木谷安憲「自分の子ども心に触れる描画活動「かいてみよう子ども心」―子ども心で描いた大人の絵と園児の絵―」大学美術教育学会美術教育学研究第52号 2020年
- 5) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 2018年
- 6) 保育所保育指針解説 フレーベル館 2018年
- 7) 汐見稔幸 幼児造形教育学研究会第46回夏の研修会「コロナ禍における子どもと保育・造形について」 2020年

注) 児童福祉施設最低基準 昭和23年2月

付記：倫理的配慮

本研究にあたっては、S 保育園の園長に本研究のための観察・参加及びインタビュー調査の趣旨、内容、方法に関する説明を行い承諾を得た。保育士・保護者への了承は園長から行ってもらい、同意を得ている。